

野口あきる

第30号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

明治維新150年記念

— 町医者野口浅次郎氏の日記を通して見えた近代の五日市 —

田ヶ谷 雅夫

(社会福祉法人ぶどうの里名誉理事長)

はじめに

私はここ10数年来、明治以降のふつうの日本人が書き残した日記(本人肉筆の現物)を収集している。その数およそ650冊。これを集めるにはだいぶ時間とカネをかけた。

私がこの日記を収集したのは決して単なる猟奇的な覗き込み趣味からではない。私はナマの明治から昭和までの近代日本の精神史を覗いてみたかったのである。私自身が戦前・戦中・戦後をどうにか生き延びてきた。残り少ない私の人生の最終的な意味やら価値やらを少しでも確立しておきたい。日記収集はそういう思いを追及するための作業のひとつなのである。

もちろん650冊全部に目を通したわけではないが、それでも明治・大正・昭和の激動の時代を生き抜く庶民のくらしがありありと浮かび上がってくる。今回は東京都下五日市町(現あきる野市五日市)の医師野口浅次郎氏の12冊から、近代日本人の生活像の一斑を窺うことにする。

野口浅次郎医師の生活

旧西多摩郡五日市町は、平成7年8月現在の人口22,250人、面積50.9平方キロメートルの静かな山あいの町である。東京都心から直線距離で30キロ、秋川の流域沿いに開け、檜原街道が貫通している細長い町で、すぐ町の西端からは山間部となる。平成7年9月に秋川市と合併してあきる野市になった。

野口医師は名を「浅次郎」雅号を「自然」と称した。野口家は江戸時代五日市村の村役人を勤めた旧

家で、彼の祖父源蔵も幕末迄組頭役を勤めていた。彼は当時旅館業を営む父傳兵衛と母テル子の三男として明治5年に生まれた。

生家の旅館は明治初年には「五日市憲法草案」で有名な自由民権運動家達の集会にしばしば利用され



野口浅次郎(自然)氏肖像画
[昭和7年9月21日]

ていた。明治14年7月3日の新聞には中島信行(元老院議員・後の自由党副総裁)を招き一大懇親会と演説会を開き野口屋楼の門前には旗章を揚げ来集する者およそ百名とある。また明治15年4月29日の新聞にも五日市町の有志者東京より弁士奥宮健之等招待し野口楼に於て政談演説会開かれし

に聴衆2~3里の遠方より山野を踰えて来会せし者2百余人に及び僻地に稀なる盛会なりとある。

このような環境の中で生長した浅次郎は、生来温厚篤実な上、キリスト教信徒で親交のあった隣家の内山安兵衛の影響もあって、自由、平等、博愛の精神を自然と身につけていったと思われる。その後も新聞記事によると、大正11年7月18日の本人の日記

で「本日内山五楓氏（安兵衛）宅へ神山、長島両氏および徳富蘇峰先生（明治20年「民友社」を創設、雑誌「国民の友」を創刊、同23年「国民新聞」を創刊、同社長）、阿部国民新聞副社長来臨、鮎漁^(注)を為し晚餐に招待を受け参会す」とある。近代日本の代表的時論家“言論の雄”徳富蘇峰はその後も数年間五日市を訪れており、内山安兵衛と共に浅次郎も交流を持った。

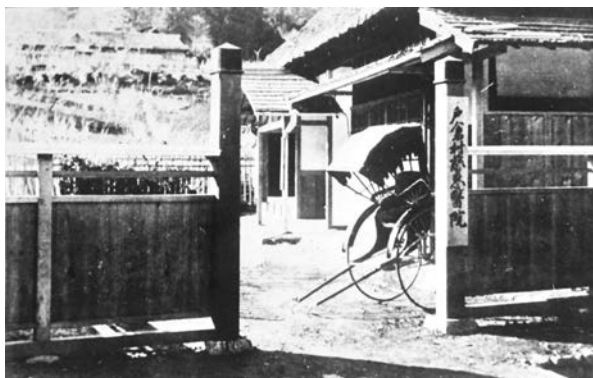
日記によると彼は明治期西洋医の養成を行った東京の済生学舎で医学を学び、その後神田須田町の病院に勤務していた。明治32年2月、五日市に戻って最初東町の首藤医師の開業していた場所に応天堂医院（後に野口医院）を開業した。



下町 野口医院 外見は集会に使われた野口楼そのままである
自転車に乗るのは野口医師 [明治末期]

明治30年兄勝太郎の早逝後旅館業を休業していた父母が再び移転開業したため、生家の旅館を改築し応天堂医院を移した。

町医者として、地域に根付いた医療を昭和13年12月17日に享年67歳で逝去されるまで続けられた。肖像画を見ると、細い眼鏡を掛け、鼻下には立派な髭を生やした謹厳そのものの美丈夫である。五日市小学校の校医を長年誠実に勤められ、戸倉診療所初代医師・西多摩郡医師会創始者でもある。過日



社会救済事業として開業した戸倉村立慈恵医院
野口医師は初代医師 [大正2年]

私はある古書店から同氏の書き残した日記原本を12冊購入した。明治32年（1899年）に始まり、最終巻は大正7年（1918年）までであるが、その19年間に明治34・42・43・44・大正1・2・4年の7年間分は脱落している。もちろんこれらの日記の流失経緯は不明である。筆跡はさすがに大正期に入ると黒ペン書きも増えるが、大方は達者な毛筆書きなので判読は苦勞した。全12冊は、どれもほとんど年間通して空白はなく記載されていて、野口医師の勤勉誠実さが伺われる。以下、めぼしい記事を項目別にまとめて紹介する。

<太字が日記原文より抜粋 原文後の（ ）内は筆者文 尚カタカナは平仮名に漢数字は算用数字にしたところもある>

1 時事

野口医師の克明な日記記載は、実は個人的な感想や意見はほとんど含まれず、非常に自制的の利いた内容となっている。家計簿同様にわずか2銭か3銭の支出の記載だけで数日も続くことが多い。また時事関係の記載もそう多いものではないが、日本の明治の旧体制から近代化に向けての変動はさすがに記録に留められてはいる。

明治32年1月19日(木) 勝海舟様午後5時入浴后俄然脳溢血を發し人事不省危篤となる

明治32年1月21日(土) 勝様薬石効なく午後5時溢焉長逝せらる 葬儀は来る25日午前9時赤坂自邸出棺青山墓地に於て仏式を以って挙行せらるる由（幕末の英傑勝海舟（1823～1899）はよく知られた幕臣で、官軍の西郷隆盛と江戸城総攻撃の直前に会議し、江戸を戦火から救ったことで知られる。われわれからすれば、遠い歴史上の人物だが、明治32年の野口医師にとっては同時代人だったのであろう）

明治35年2月13日(水) 昨日 日英同盟発表せらる

12日上院に於て桂首相 下院に於いて小林外相共に日英同盟成立の旨を發表す 協約6ヶ条有効期間5ヶ年（明治維新からわずか30数年で、日本は欧米先進諸国の文化文明に追いつくべく必死の努力を重ねていた。そしてその当時、もっとも脅威だったのはロシア帝国の侵略であり、日本はイギリスと手を結ぶことで対抗しようとしていた。五日市町に住む野口医師にとっても、こういう国際状況は切実感あるニュースだったのであろう。そして間もなく日本は日露戦争に突入する）

明治37年2月6日(土) 昨夜俄然日露事件漸く危機一髪今や戦端急進の初徴を具へ動員令発布せられ人心大に発奮せり 三道学校に於て撮影す

明治37年2月7日(日) 市倉文吉・佐藤光太郎右二氏日露事件のため動員令下り上京 両氏へ餞別金1円50銭と紙1状宛

明治37年2月10日(水) 宣戦の詔勅下れり

明治37年2月11日(木) 旅順に上陸日露大海戦あり日軍大勝利

明治37年3月6日(日) 陸軍予備役動員令下れり 五日市に於て13名出征

明治37年3月9日(水) 五日市町征露軍人予備后備出発午前8時松原社前に於て一同撮影 続小宮村征露軍人を権田橋上に於て見送り人と共に撮影す



小宮村軍人出征 権田橋にて [明治37年3月9日]

明治37年4月15日(金) 第7回旅順海戦の報 13日我が艦隊旅順港に停泊の敵の戦艦1隻 駆逐艦1隻を撃沈し敵将司令長官海軍中将マカロフ氏戦死せり

明治38年1月2日(日) 旅順軍降伏開城陥落 明日祝捷会開会のため評議員会開会列席す

明治38年3月11日(土) 午前10時奉天占領せらる公報

明治38年3月18日(土) 学校祝捷連合大運動会を松原に於て執行 夜は提灯行列を催し町内を巡回せり

明治38年5月28日(日) 大海戦号外 昨27日対馬海峡に敵艦隊発見 わが連合艦隊これを邀撃殆ど全滅のごとく撃破せり

明治38年6月1日(土) 日本海大海戦大勝利 祝捷会を当町に於いて開催

明治38年9月6日(水) 昨5日東京日比谷公園に於いて国民大会を催し警官の抵抗により非常に奮激し一大修羅場 隣宮内省警察署を焼き国民新聞社を破壊し

その惨状恰も戦場の如しという 講和条約大屈辱の余情遂に斯くのごとき結果を来たせり (小国日本がロシアと戦端を開き、国民がいかに一喜一憂したかがうかがわれる。しかし・・・)

明治39年3月21日(水) 戦死者5名の村葬を広徳寺に於いて執行出席す (国民の負担は大きいものがあった)

明治39年9月30日(日) 上土屋前に於て凱旋門及中町のだしを撮影す



日露戦争凱旋記念の祭 中央に山車 右に緑の凱旋門 [明治39年9月30日]

大正3年8月24日(月) 日独開戦を決定 その旨列国に向かい通牒す

大正3年11月7日(土) 青島本日陥落せり (第一次世界大戦にも日本は参入するが、国民生活は決して豊かにはならなかった。起きたのは米騒動である)

大正7年8月13日(火) 昨日午後7時半米価問題価格暴騰のため神戸市に一揆暴発し鈴木商店へ火を放ち焼き払い 11時神戸新聞社を焼きなお鈴木別邸も焼き払えり 実に驚くに堪えず

大正7年11月13日(水) 世界大戦休戦条約11日午前11時成立し調印せられたり 本日国旗を揚ぐ講和休戦の祝意のため夜内山本宅にて講和記念画会開催 野口医師の日記はここまでであるが、近代日本の胎動をリアルタイムに感得する一日本人の様子が感じ取れる

2 医事

野口医師は、町医者として誠実な診療を続けていたように、日記からは伺える。五日市小学校の校医として、また町の警察署からのさまざまな依頼にも応じている。医学雑誌などもよく購読されている。

明治32年1月11日(水) 須田明々堂眼科研究の件に付

松田氏を訪い 帰路本郷より下谷橋田院長本宅に立寄り帰院す

明治32年1月21日(土) 午後1時衆議院に於て医師法案議題に上りしを以て傍聴に行り

明治32年1月22日(日) 須田に於て睫毛乱生症手術あり 午後6時院長本宅に於てかるた会あり出席す 帰院夜2時 小島氏(五日市の開業医・萩原タケが勤めていた医院の医師) 病院に立寄る

明治32年2月1日(水) 須田町眼球内容除去術をす かるたあり豚肉馳走にて勝利

明治32年2月24日(金) 午前1時半小島氏より紹介により留原来住野氏へ往診す 結核性腹膜炎にて瀕死期なり 海老沢峰章氏(当時有名な引田の医師) 川口屋に往診あり 余も往診す

明治32年2月26日(日) 神田警察署に移転開業届出す

明治32年2月27日(月) 金40銭 応天堂医院看板及大工代 首藤氏(応天堂医院を開業する場所で医院を開業していた先輩医師) 送別のため町内へ配膳せり

明治32年2月28日(火) 海老沢峰章氏を訪う

明治32年3月7日(火) 首藤氏本日移転開業届出す

明治32年6月12日(月) 学校生徒のトラホーム検査す (地元の週刊「多摩新聞第8号」明治42.5.20に、次の記事が掲載されている。「小学生のトラホーム(しや) 西多摩郡五日市町尋常高等小学校生徒568名は(はん) 一般同町野口浅次郎医師の健康診断を受けしところ、十数名の重症トラホーム患者あり尚益々猖獗を極めんとする兆候ありと云う」)

明治33年3月11日(日) 午前4時利倉屋主人便所へ通行の途中 縁に於て卒倒し右額頭部約2寸半挫傷す 縫合9針

明治33年5月8日(火) 上町惣吉妻りん臀位にて軀幹及び頸部まで排洩し頭部娩出せざる為め来診(中略) 頭部を娩出す 続て胎盤も排出す 金2円右手術料

明治35年9月21日(日) 午前2時出発小宮村溺死人上野シノ検死 死体2枚 場所1枚撮影す

明治36年12月9日(水) 堀内氏化膿性肋膜炎に穿胞術を施行す 金2円右施術料

明治40年2月24日(日) 青梅町坂上に於いて医会を開き出席 郡医師会準備委員5名を選出することに決し 余も委員に選出せらる 1円50銭会費

明治40年4月26日(金) 平野氏午後8時洋燈墜落のため衣服に移り 顔面全部上肢肘関節より指尖迄 股関節より足踝関節迄火傷 体温36度8分 翌27日午後10時心臓麻痺を起し死亡

明治40年6月27日(土) 薬局生依頼の件にて海老沢氏行

明治40年7月11日(木) 午後1時より玉林寺に於て種痘施行 接種者663名

大正5年4月6日(木) 小学校生徒体格検査午前10時より執行

大正7年3月28日(木) 五日市署に於て嬰兒死体解剖を執行

地域の学校や警察の業務とよく協力し、町民のために深夜の往診も厭わない。診療科目も内科・外科・眼科・産婦人科・小児科と、とにかく町民生活万般に涉って医療を続けている。まさに地の塩と言ってよい活動には敬意を表したい

3 私生活・身辺事跡

派手派手しいものではないが、野口医師は結構趣味が広く、質素な人生を楽しんでいたようである。また、感情を抑えた家族の事跡も淡々と記されている。

明治32年1月1日(日) 実家に於て新歳を迎ふ 正午首藤氏と内山安兵衛氏宅に於て屠蘇の饗応を受けり

明治32年1月26日(水) 須田にて睫毛乱生症手術あり 出口氏(内山安兵衛実弟太三郎「貧民子弟教育救助会」の発起人 会のため奔走中)の依頼にて日本橋元浜町世六銀行へ行く

明治32年2月6日(月) 坂本 山崎両氏を訪い不在 菊坂町新聞講覧所に寄り天野氏にて晩飯を喰し午後9時橋田(院長) 本宅にて写真会の協議をなし帰院す 時に11時

明治32年2月11日(土) 紀元節憲法発布十年祭あり青年革進会を萬世倶楽部に於て開き午後1時演説会あり 余傍聴す弁士島田(三郎) 田口(卯吉) 松村竹石 海老名弾正等なり 金10銭右傍聴料(野口医師は自由民権に関心があり、この後も海老名弾正が大正館に来た時傍聴している)

明治32年5月21日(火) 午後撃剣を試む

明治32年11月6日(月) 高橋格氏勤能校退職届出す

明治32年11月11日(土) 高橋格氏(五日市小3代目校長として功績大、2代目千葉卓三郎の後を引きつぐ) 五日市出発 見送り人五日市学校生徒一同及同窓会一同外有志者共凡350~60名小峰峠下まで送り 続て八王子町迄50~60名

明治33年5月3日(水) 木谷氏(東京での医師仲間) 先月20日ドクトルの学位を受け米国より帰朝 来

五す（五日市に来た） 菓子折を贈らる
明治33年11月15日(木) 文読みて眠り催す夜長かな
明治35年2月18日(火) 午前5時半五楓（内山安兵衛）
泰助両氏と出獵す 油平 草花 平井 大久野等を
廻獵 獲物19羽 帰路は大に下脚の疲労を感じ
明治35年11月6日(木) バーネット乾板形カビネ1ダ
ース・ピーオービーカビネ形16枚・写真台紙カビネ
52枚・バット1枚2円60銭右数品代
明治35年11月15日(土) 歌子（夫人）午前8時裏二階
西側より誤って川崎屋（隣家）との間へ夜具を乾さ
んとして共に墜落せり 幸い夜具を下に敷きしを以て
顔面右肩胛及び腰部を打撲す 至って軽症なり 尤妊
娠7ヶ月
明治36年1月7日(水) 海老澤（引田の医者）坂本
（伊奈の医者）両氏へ年賀訪問す
明治36年1月16日(金) 午前10時内山主人其他20有
余名にて兎狩り出発 上川口山にて網の見張りを為せ
しにいわゆる脱兎の如く馳せ来たり網に掛り 一回
は取り失いしも2回目に漸くにして捕獲せり 此日は
の1頭捕獲のみなり（さながら唱歌「ふるさと」の
世界である）
明治36年2月28日(土) 午前7時30分女子分娩母子共
健全 午後1時半大野老母殿来る 大野亀次郎氏 高
橋格（赴任中、野口家の娘元子と結婚親戚となる）
野口秀次郎へ出産の報（八王子の妻の実家や親戚に
知らせた）
明治36年3月5日(木) 先月28日分娩の女子「千代
子」と命名す 本日体重2639g身長50センチ
明治36年3月8日(日) 自転車練習を始む
明治36年3月11日(水) 自転車3日間練習 結果10
間（180m）乗走せり
明治36年5月2日(土) 自転車にて引田迄往く 途中
山田にてハンドルを傷く修理1円55銭（翌日左胸腋
下の筋肉疼痛の記事あり）
明治36年5月16日(土) 鉄亜鈴の練習に着手す 体重
11貫450匁（54.4キロ）
明治36年5月17日(日) 余の裸体を撮影す（昨日とい
い今日といい、三島由紀夫風）
明治37年3月16日(水) 関八州紳士録写真写す
明治38年2月17日(金) 海老澤峰章氏長男頼章氏歩兵
として召集せられ送別の為め往訪し写真2枚撮影
金1円錢別
明治39年1月2日(火) 上土屋（土屋常七氏宅）へ千
代子（長女）と年賀 余興演芸の饗応を受く 午後川

原氏にて新年饗応あり 夜かるた会を自宅に於て開
催 余興として蓄音器を发声す
明治39年4月21日(土) 22日西多摩郡教育会総会を
五日市町小学校に於て開会 会員集まる事5百名
東京より井上郡長外に與興より講談師来講し頗る盛
会 夜に至り活動写真あり 学校運動場に於て開け
るにて来会者約4千名と称す 実に五日市に於ける
未曾有の来観者なり 午後9時半閉会后 有志者慰
勞会を紀の国屋に設け各自覲を尽し帰宅せり
明治39年12月8日(土) 午後より煤払いを為す 萩原
角左衛門氏（戸倉村村長）再び道路問題にて来る 共
に上土屋氏を訪問す
明治39年12月10日(月) 五日市以西3か村（檜原・
小宮・戸倉）より番場坂改修に付町会の決済を変更
し 尚平坦にせし事を岸（忠左衛門）・馬場徳（兵
衛）及び余に向って仲裁を依頼せり



改修工事の終わった西沢橋と番場坂
五日市警察署前の都道はまだなかった [明治40年4月]

明治40年10月1日(火) 書画骨董会本日納会無事終了
是真黄石公授龜の図13円 黄檗澄元の書4円（よ
いお買物だったのかどうか）
明治41年4月16日(木) 夜自宅に於て謡の稽古 会す
る者9名
明治41年12月27日(日) 午前1時父上脳出血を起し
人事不省となり左半身不随
明治41年12月28日(月) 父上経過宜しからず依て青
木医生（この頃野口医師は書生4人に各部屋を与え
後輩医師の指導育成にあたっていた）の診察を乞う
午後10時15分遂に永眠せらる
明治41年12月29日(火) 本日亡父の仮葬式執行（年
末のため仮としたものと思われる）
大正3年4月11日(土) 午前6時八王子大野より電話
歌子昨夜重体と相なり午前4時水野氏注射により
漸く回復せしという（夫人は八王子の病院に入院中

だったようである)午後1時車にて(人力車)八王子へ赴き歌子話せしに疲労甚だしく午後2時苦悶を發し注射2筒施す

大正3年4月15日(水) 歌子益々加わり危篤状態なるを以て今晚も大野へ滞在する事とし 院務を依頼せり

大正3年4月16日(木) 歌子午後1時再び呼吸困難を發し顔面に唇にチアノーゼ發し 本人も自覚して最後の遺言児女の后来を託し甚だしき苦悶もせずして午後3時30分全く永眠し他界の人となれり

大正3年4月20日(月) 本日午前11時蓮室浄臺大姉の葬儀執行

大正3年6月30日(火) 明正(長男)乳母きくと共に八王子大野へ行く 即日左記の家南多摩郡小宮村字西中野士族北島作次郎氏へ預ける事と為す(妻歌子亡き後、妻の実家大野家より幼い長男を預ける事をすすめられていた)

大正3年7月28日(火) 町内の女子補習学校の委員会出席 午後4時謡曲練習 午後9時大正館へ海老名弾正氏来演聴きに行く

大正3年11月24日(火) 午前11時羽生氏と橋田(院長)方へ行 大に響応を受け三内氏の件にて相談を為せり 大略結婚談成立せり

大正5年4月26日(日) 蓮室浄臺大姉三回忌供養相當む 明正乳母と共に来る 墓参の為め

大正5年10月28日(土) 萩原たけ子(近所の幼馴染み この時日本看護婦協会長、後に日本初ナイチンゲール賞受賞者、日赤看護婦監督)より文展像尊書寄贈せらる

大正5年11月25日(土) 本日結婚式挙行(再婚である)

大正5年12月20日(水) 母こと本日午後5時半遂に遠逝せらる 通夜

大正7年6月1日(土) 本日より鮎解禁 午後明正(長男)を連れ川に行く 不漁なり

古風な撃剣とか謡、歌留多会、書画骨董趣味もあれば、蓄音機、写真、自転車乗りなどの当時一番のハイカラ趣味もある。けっこうお金がかかったろう。平日の真昼間から堂々と狩猟、兎狩りなどに加わっているのも、おおらかでいい

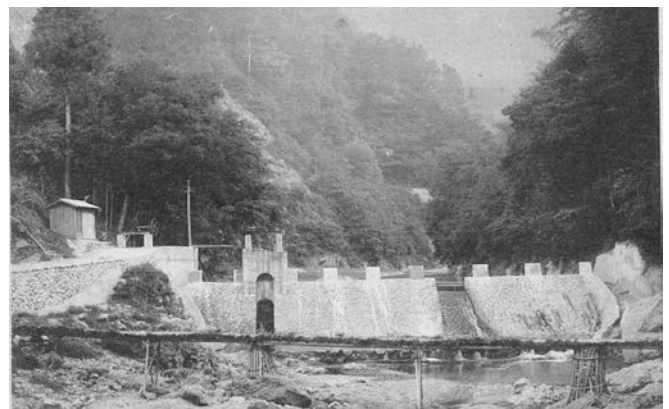
4 文化・文明

野口医師が五日市町で地道な医療を続けていた頃、日本は次々と新しい洋風の文化・文明を旺盛に取り入れつつあった。それは五日市町という西多摩地区

のささやかな地域でも同様であった。野口医師は積極的に西洋文物を生活に抵抗感なく次々とわが物として行く。自転車乗りもその一例であろう。

明治33年3月21日(水) 五日市電信開通す

明治39年7月23日(月) 水力発電の件にて小宮村交渉委員と瀬沼(東京府会議員)・馬場(元五日市町長)両氏及小生3名と共に小宮村役場に出張交渉を開始し 小宮有志の会合をうながし帰五す(小宮村の内に秋川を堰止めて取水場を作る件、現在乙津追分に堰が残り取水口から水を引き込んだ貯水池が現存、東京都水道局の管理)



乙津追分地区に完成した秋川水力発電の取水場の堰手前に見えるは土橋 [大正]

明治40年4月21日(日) 午前8時土屋氏と別れ 同9時10分高橋格氏宅を訪問 袴を借用し 上野連絡所にて内田氏に逢い 共博覧会内第一会場を觀 正午生花陳列会にて土屋氏に再遇 吉兵衛料理出張店にて午飯を喫し 再び館内を見 演芸場にて獅子・丸一太神楽を見 夜に至り第一会場のイルミネーションを觀る 実に其美觀言語に絶せり

明治41年5月5日(火) アセチリン瓦斯発生機ランプ6箇所(町にガス灯がついた)



五日市上町電柱がなく大通りに鶏が遊ぶ 右側家並みの前にガス灯が見える [明治末期]

明治41年5月6日(水) カーバイト56銭 (それまでは石油ランプだったのであろう)

大正3年5月14日(木) 大正博覧会 午前5時人力車にて八王子へ行く 8時25分汽車八王子発車新宿にて電車に乗り換え11時上野着 銅像前茶店にて昼食を食し 会場全部を見る 夜はイルミネーションの見物を為せり (この見物は学校生徒160名の参加に同行したもの。ちなみに五日市鉄道が拝島～五日市間に開通したのは、大正14年4月のことである)

大正3年11月1日(日) 水力発電去る10月16日許可となり鶴屋に於て規約書その他に付協議会あり出席

大正5年12月22日(金) 電燈本日初めて点火 (「電燈本日」に4つ◎印を付けている。よほど感激的イベントだったのであろう)

大正7年9月8日(日) 本日より当町内丈分電話開通せり

5 家計・物価

野口医師は昼夜を問わない医務の傍ら、一家の柱石として家計のすべてを掌握している。明治末期の日本経済はまだ円よりも銭単位の流通が一般であった。野口医師の日記はまるで家計簿さながらの細かい金銭出納が克明に記載されている。毎年末には家計の総括もしている。ご両親には時々50銭から1円の小遣い銭を渡しており、また生活家計を夫人に任せ様子もない。当時はそれがごく当然だったのかもかもしれない。

明治32年3月17日(金) 酒40銭 醤油10銭 海苔8銭 鮭35銭 塩2銭 昆布4銭 火の番費用3銭 消防費用15銭 (全部銭単位の支出である)

明治32年12月31日(日) 五日市諸商店17口支払い225円53銭3厘 年間収入1,536円70銭 支出1,402円45銭2厘 差引残高134円24銭8厘 (当時はお盆と大晦日の一括払いの商習慣が一般的だった。この年移転開業のためか残高は少ない)

明治33年6月13日(水) ^(こうもり) 蝙蝠傘3円25銭 羽織紐及び帯留1円 午後3時逗子へ出発 (逗子には知人の内山安兵衛氏在住) 新橋迄車代20銭 新橋より逗子まで86銭 逗子案内誌25銭 養神亭迄車代と茶代1円40銭 14日葉山 海水浴 15日藤沢 大磯 藤沢より新橋迄汽車代2円50銭 八王子迄汽車代2円20銭 (野口氏はよく各地に旅行している。当時はモダンな生活流儀だったのであろう)

明治33年12月31日(火) 年間収入2,153円82銭 支出

1,397円70銭 残高756円12銭 (前年よりは好調だが、残高を月にすれば63円だからそう大儲けしている訳でもない。女中や車夫も雇っているし、専用の人力車を新調している。また、町内外の人達とのおつきあいの出費等結構持ち出しが多いのではないか)

明治35年12月31日(水) 年間収入1,793円67銭5厘 支出1,470円16銭5厘 残高323円51銭 (たいしたことなし。ただし支出には台所等修繕費208円16銭7厘が含まれる)

明治36年10月12日(月) 午後2時馬場・川原両氏と禁煙を契約を為す 若し違背せば罰則として頭髪を剃る事 (おもしろい記事である。ただし、翌37年6月21日の日記に「タバコ20銭」とあるから、禁煙は半年少々でパーになっている)

明治36年12月31日(木) 年間収入1,741円93銭 支出1,448円18銭 残高293円75銭 (前年並みというところ。堅実に安定している。ちなみに野口医院が年間購読している雑誌は6誌に及ぶ。医事新聞・国家医学会雑誌・神経学雑誌・通俗宗教談・声雑誌・女学雑誌。よく勉強されていたようだ)

明治37年12月31日(土) 年間収入1,904円53銭 支出1,526円60銭 残高377円93銭

明治38年12月31日(日) 年間収入2,667円60銭 支出2,165円60銭 残高502円

明治40年2月16日(土) 金30円大野たかへ送る 金12銭折釘10本 金49銭井戸なわよりのかかり 金1円5銭ばた (バター) 2罐 こんびふ (コンビーフ) 1罐

明治40年2月27日(水) 菓子10銭 うどん10銭 剥き身10銭 饅頭5銭 金平糖3銭 医学大辞典19円 (何ともかわいらしいと言うかつつましい支出の後に、ドーンと医学大辞典19円也が来るところがすごい)

明治41年8月15日(土) 金側両蓋懐中時計鎖磁石付100円 (野口先生、張り込みましたね！)

大正3年12月31日(木) 諸払い17口590円28銭 (加入している生命保険がなんと8件！掛け金：日本生命300円 仁寿生命500円 共済保険1,000円 第一生命1,000円 日清生命500円 蓮華生命700円 日本医師共済生命1,000円 徴兵保険500円 受け取りはご子息野口明正氏 掛金総額は5,500円。堅実そのもの)

大正5年3月30日(木) 町役場より通知 町医給料15円 学校医手当15円 往診料15円 (15回分) (野口医師の地域貢献が伺われる)

大正7年12月31日(火) 年間収入15,909円55銭 支出3662円79銭9厘 残高12,246円75銭1厘 (かつてない高収入。医院経営は順調の様子である)

私の所蔵日記はここまでで尽きる。野口医師は、この後20年間生存し、昭和13年12月17日に67歳をもって逝去された。

6 むすびに

明治32年(1899年)から大正7年(1918年)までの12冊の野口浅次郎医師の書き残した日記を拝見して、まず感じたのは明治を生きた人の生活の質実さ・折り目正しさであった。彼は東京都下西多摩郡五日市町の一介の町医者として開業し、町民のすべての医療面で大きな貢献を果たした。時に五日市小学校に出向いてトラホーム(当時多かった眼病)検査をしたり、校医として生徒の東京の宿泊旅行に付き添う。警察では事故死した者の死体検案から解剖まで行う。難産の患者には全力を挙げて出産に漕ぎつける。昼夜を措かぬ彼の努力には全く頭が下がる。そこには今の高度にシステム化された無機質な大規模医療には見当たらない暖かくヒューマンな医師としての真骨頂がうかがえる。しかも上京して医学会に出席したり、高価な医学書を購入したり、研鑽も惜しまない。

もちろん現在の医療に比べれば当時の医療レベルは高くあるまい。けれども野口医師は地域に密着した町医師としてフルに努力され、深夜でも休日でも往診を厭わず、町民の生活に密着した、いわば「病氣」ではなく「人間」を相手取った医療を懸命に実践されたように見える。それは、もしかしたら現在の日本の医療や福祉に欠落した大事な基本理念なのかもしれない。

一方、彼は堅実な余暇を、驚くほど広範囲にたしなんでいた。近くの山に登山し、兎狩りを試み、鮎釣りをする。当時最先端のモダンな自転車乗りで遠出する。写真撮影も自分で現像・プリントまでやる。謡をうたい、撃剣をし、タバコを吸ったり禁煙したり、電燈でも電話でも真っ先に飛びつく。骨董を集め、盆栽、庭の手入れに余念がない。しょっちゅう何やかやと人を招待したり、よそで饗応にあずかったりしている。この日記の書かれた頃はちょうど日露戦争にあたるが、戦争の進行に一喜一憂し、政治にも関心があるようだ。私はそこに、江戸時代から引き継ぐ日本人らしい気骨と精神的健康を思わ

ずにはいられない。

幕末、日本を訪れた外国人が一様に驚いた日本人の性格の謙虚さと、それと同時に伴った知的好奇心を、まさにこの日記の筆者である野口浅次郎氏に私は読み取った。それは昭和6年からの軍部の妄想による日本のアジア侵略が拡大する以前の、日本が精神的健康を高く保持した時代として、評価すべきかもしれない。野口医師が明治39年の年末に特に書き残した彼の感想文は、そのことをよく示しているように思う。

「人類の真正合理なる生活とは 信仰の根底に立ちて常に靈性の大喜・大満足を得つつ 然も永遠に自己の人格と人類生活の現状とに不満足を感じ 終に無限に到達さる事なき彼の理想の実題に向つて努力し精進するの生活是なり 此の生活以外は一切の人類の生活は無意義なり迷妄なり 吾人は絶対と合一して靈性の平安・大満足を得つつ 然も永久に自己と社会との生活現象に満足せずして 之を無偏に向上し 進歩せしめ 之を益々靈化するがために努力す可きなり」

編集後記

平成26(2014)年11月、当時山梨学院大の講師(社会福祉法人ぶどうの里名誉理事長)であった田ヶ谷雅夫先生が野口浅次郎医師の日記を購入されたとの事で郷土館に来館されました。いろいろ調査されて先生発行の『菱山通信②』号にその論文を掲載されました。それを元に校正編集をさせて頂き「郷土あれこれ第30号」として発行させて頂きました。

日記から見える野口医師は見識が高く職業柄町内外に広い人脈を持っていたため、表面には出ないものの裏方で町の近代化を牽引し、その実現のため常に仲立ちをした実力者でした。『五日市町史』などで推定年代とされてきた数々の事柄がこの日記によって解明されたともいえる貴重な史料です。田ヶ谷先生は購入された日記を、その後五日市郷土館にご寄贈下さいました。

なお、この発刊にあたり、野口浅次郎医師のお孫さんに当たられる野口眼科医院の院長野口清美先生には快くご承諾をいただきました。末筆ながら両先生に心より感謝申しあげます。

五日市郷土館 調査研究員 清水菊子